2011 道東TCM 6月　報告書(U-13)

期　日　　平成２３年６月１９日（日）
会　場　　北見モイワスポーツワールド

１．参加選手（計１６名）

森本　優吾、阿部　将之、工藤　丈斗、石黒　倖吉、淵上　健太、斉藤　俊介、
一戸　拓斗、木村　拓真、(以上　R.シュペルブ)
山田　和司、国井　幸平、長澤　友大、中村　康輝、菅原　直弥（以上　ＳＣ釧路）
山嵜　大生（幣舞）、　佐々木健人（鳥取）、　鵜野　優志（鳥取西）、

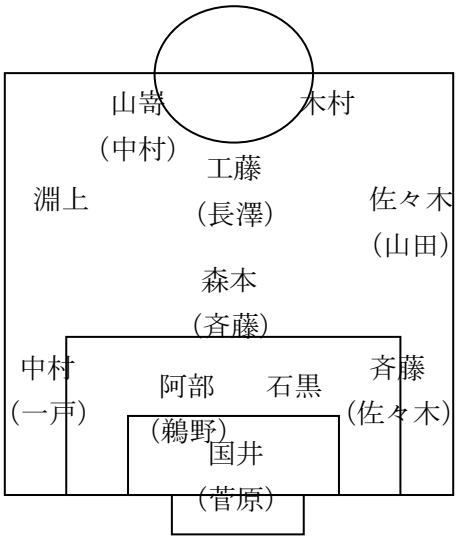
２．はじめに

◎攻撃面～常にサポートをすることを意識させた。前にボールが入ったときに、受け手が前をむいたときにはより前でのサポート、前を向けていないときには横や後ろでのサポートをすることについて話した。同時に優先順位として、裏を狙うことを心がけさせた。

◎守備面～インターセプトを狙えるポジショニングを取ることを第一とした。以前のマッチでは引きすぎてしまい、簡単にくさびにボールが入り、前を向かれる場面があったので、裏を取られずインターセプトを狙えるポジショニングを取ることを意識させた。

３．ゲーム

①１試合目　vs 根室

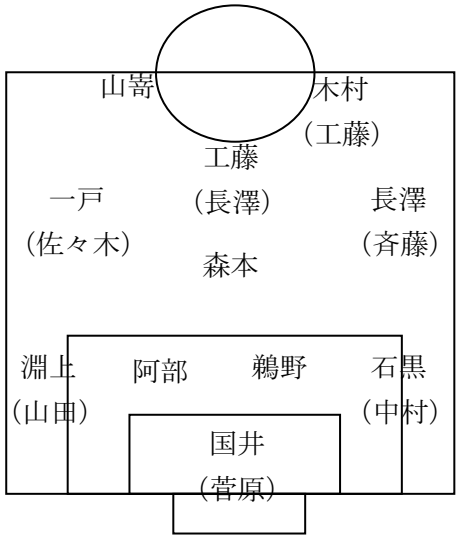


相手は数名をのぞいてスキル・フィジカルで劣り、プレッシャーも弱かったため、ポゼッションしながらボールを前に進めることができた。裏を狙う動きが何度も見られ、トップが下がってきたスペースに２列目がとび出し、ＧＫとの１対１の場面をたくさん作り出すことができていた。

多くの点数を取ることはできたが、１対１の場面を何回も外す、ゴール前でシュートを打たず、味方にパスするなどフィニッシュの精度や積極性に欠くことがあった。

テーマであったサポートについては、ボランチに入ったときにサイドバックやサイドハーフがかかわりボールを受け、ビルドアップをすることができたり、センターバックも後ろでかかわろうとしていた。しかしトップやトップ下に入ったときにはかかわろうとするのが少し遅れることもあり、効果的に崩すことは少なかった。

② ２試合目　vs 十勝



相手チームはクラブチームの選手が一人もいなかったため、Ｂチームといった感じであった。ここでもアプローチが遅く、簡単に前を向けることが多かった。

数名の選手は、ボールが動く度に常にポジショニングを変え、サポートするという気持ちが見られたが、多くの選手はボールが選手に入ってからポジショニングを取るという少し遅れてのサポートになっていた。

４．現状と課題

① ベーシックスキル

技術がある選手が多く、コントロールやパスなど精度が高かった反面、芝が長く、思ったように強いパスが出せない選手が多かった。また動きながらのコントロールやパス、プレッシャーが強いときの精度などについては、課題である。

サイズがない選手でもその分スキルでカバーする選手がいる反面、サイズやスピードがなくツライ思いをしている選手もいた。今回は相手が色々な面で劣っていたため、サイズやスピードがある選手は簡単に抜くことができていたが、相手が「うまく速く強い選手」になったときにはそううまくいかないことが予想され、連係プレーで崩すことができるようになることが課題である。

② 守備

前回のマッチに比べ、インターセプトの意識が高まり、その場面も多く見られた。裏を取られることもほとんどなかったため、ＤＦ面でのポジショニングについては、改善されていた。しかしそれも個人差があり意識しそれを実践している選手とそうでない選手が明確になっていた。また１対１の粘り強さに欠け、簡単に抜かれる選手も少なくなかった。

サイドに入ったときに、ボールウォッチャーとなり自分のマークすべき選手を見失うことがあった。サンドすべき場面で何度か奪いにいくことはできていたが、「ブロックをつくって奪う」という意識はなく、個で奪うという感じであった。

③ 攻撃

前へ出る意識が高く、効果的に２列目からのかかわろうとすることが多かった。「常にサポート」はできていなかった。サイドでかかわることが遅く、「言われてから出る」ことで相手選手もポジショニングを修正し、崩すと言った感じは多くはなかった。フィニッシュの精度も欠き、「取るべき所で取れない」といった印象を何回も受けた。

５．今後について

選手が一生懸命プレーすることは評価したい。日常のトレーニングやマッチの前に確認したことを意識し、自分で判断してプレーして欲しい。今後も日常のトレーニングからハードにプレーし、この技術を伸ばしていってくれることを期待している。バス内でのマナーも人に迷惑をかけないよう自分で行動するとともに、コーチたちからの指導もさらに徹底していきたい。

文責：釧路トレセンＵ－１３チーフ　八城　雅彦